

目的：余暇社会の到来というキーワードのもとに、余暇が単独で成立するかのように論じられることが少なくないが、実際には他の生活時間や金銭的な側面も大きく関与している。本報では世田谷区での調査結果を用いて、夫妻の社会的・文化的生活時間に関する現状を、時間と金銭を媒介に考察する。

方法：調査方法・調査協力者の特徴は第一報に同じ。妻の就業形態別に社会的・文化的生活時間を検討すると共に、アンケートから他の生活時間の余暇への影響、収入と時間に対する考え方、余暇費用等についてジェンダー分析した。

結果：社会的・文化的生活時間は平日では妻の方が長く、休日では夫が妻を上回るが、妻の就業形態によって実態は異なる傾向を示し、妻常勤の夫妻では平日・休日とも妻の方が短い。アンケートによれば、いずれの夫も社会的・文化的生活時間に対して睡眠、仕事、接待、育児時間から受ける影響をあげた者が多く、妻常勤の夫では、これらに加え調理、掃除、洗濯など家事時間からの影響がみられた。常勤妻の場合は夫の指摘した項目のほとんどで夫より影響を強く感じており、特に睡眠や家事、育児などからの影響が大きかった。収入を選ぶか時間を選ぶかの選択については、「労働時間を減らすことで収入が減っても、自由時間を確保したい」への共感度の高さをはじめ、いくつかの特徴が示された。費用面では「個人で楽しんだり学んだりするもの」への支出に夫と妻の差が顕著にみられ、夫は妻の倍以上を支出していた。定年後に過ごす余暇については、具体的にしたいことがある者が、夫、妻とも半数を占めており、その費用も示された。